鹿児島県青少年赤十字
賛助奉仕団会報

さくらじま

第12号

青少年赤十字賛助奉仕団信条

1．青少年赤十字の充実発展に協力奉仕する。
2．赤十字思想の普及啓発に努め，平和な社会の実現に寄与する。
3．志を同じくする人々と手をとりあい，研鑽に努める。

発行者
鹿児島県青少年赤十字賛助奉仕団
発　行
令和５年３月１日

きょうの僕のがんばり一〇〇万点！

日本赤十字社鹿児島県支部
事務局長　橋口　秀仁

青少年赤十字賛助奉仕団の皆様には、日頃から青少年赤十字の普及・啓発や活動の充実にご支援・ご協力を頂いており、深く感謝申し上げます。

青少年赤十字は、児童・生徒が赤十字の精神に基づき、「気づき」、「考え」、「実行する」という態度目標の下に様々な活動を展開するもので、本県でも、五〇〇近い学校や園において様々な活動が実施されており、優しさや思いやりの心を持って、自ら進んで人の役に立とうと思う、子供たちの健全な「こころ」の育成に極めて重要な役割を果たしています。

令和四年度も、コロナ禍の中で一部実施内容の見直し等を余儀なくされましたが、賛助奉仕団や指導者協議会の皆様のご協力をいただきながら、各種活動を効果的・効率的に実施することができました。

トレセンも、小中高合同の夏季合宿トレセンから、学校種別の秋季一日トレセンに変更となりましたが、参加者の感想書きからは、緊張していた子供たちが、講習やグループワークを通じて交流を深めながら「自発的に、主体性を持って行動したい」と思うように成長していく様子がはっきりとうかがえ、このプログラムの持つ意義を実感したところです。

小学校トレセンでは、二人の児童が、「きょうの自分のがんばり」に対し、「一〇〇万点」を付けてくれました。トレセンを経験した子供たちが、各学校で青少年赤十字活動のリーダーとして活躍するとともに、将来、赤十字活動や地域社会を支えてくれることを期待しています。

県支部では、今後とも、青少年赤十字活動の活性化と活動内容の充実に努めて参りたいと考えていますので、引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

青少年赤十字活動と令和の日本型学校教育

鹿児島県教育庁義務教育課企画生徒指導係
指導主事　戸川　浩介

昨今、国際情勢はますます複雑化しており、痛ましい内容の報道もなされています。私たち一人一人、そして、社会全体が答えのない問いにどう立ち向かうかと問われているように思います。

様々な情報が流れる中、子供たちもまた、未来の創り手として、一人一人が自分の頭でしっかりと情報の真偽や価値を判断し、世界の平和と人類の福祉に貢献するために何ができるかを考えていく必要があります。

そんな折、学校教育においては、「令和の日本型学校教育」が一つのキーワードとなっています。予測困難な社会において「目の前の事象から解決すべき課題を見いだし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出す」という資質・能力が強く求められているところです。

こうした資質・能力の育成を念頭においたとき、青少年赤十字で行われている児童生徒の主体性を基にした様々な取組はますます意義のあるものになると考えております。また、各学校で行われている教育活動を「気づき、考え、実行する」という青少年赤十字の態度目標に照らし合わせ、振り返りや価値付けを行うことは、今求められている資質・能力を育成する上でも有効な手立てとなるのではないでしょうか。

人道の考えを基にした青少年赤十字活動が、各加盟校の連携により豊かに展開され、その積み重ねが争いのない、思いやりにあふれた未来につながることを期待しております。

賛助奉仕団への思い

「JRC登録式」の話から

笛田　茂

小学校高学年から、中学校の生徒の皆さんへ良く話すことを思い出して綴ることにしました。

鉄には、七百二十三という変態点があって、加熱の時も、冷却の時も、この温度を通過する時に、鉄の結晶構造が変る。これをねらって、素早く鎚打ちする。そうすることで鉄の組織微細になり、強く朽ちにくい最強の鉄に変身する。

人間も同様ではないか。肉体的にも精神的にも発達しながら不安定な時期でもある小学校五年生から中学校三年生くらいの間に、タイミングよく変身させてあげる必要がある。「啐啄同時」とは、まさにこのことである。

「十一年目の春」

室屋　勝男

「垂水のベトナム難民の皆さんを平川動物園へ～」の声かけに、青少年赤十字加盟校が募金活動を行った。

昭和五十六年五月、貸切バスは動物園に着き、少人数グループ毎に、指導者協議会の会員二～三名で案内した。当時、皆与志小勤務で同僚の女性教諭（英会話堪能）と活動した。園内案内の記憶は朧気である。しかし、帰り際、出口からバス駐車場までの路上話は、実に鮮明に残っている。「私は、この後、アメリカに渡り、懸命に学びジャーナリストになる。ベトナムが元の平和な国に戻るよう、また、人間は皆互いに助け合うよう訴えていきたい。」と、二十歳くらいの女性は、真剣な眼差しで話した。

この活動を通して、赤十字活動を認識でき、青少年赤十字の活動の目的に気づいた。教員、十一年目の春。

偉大なる先輩の心を受け継いで

野村　大綱

赤十字の基本原則の骨格を体系づけたジャン・ピクテ（元赤十字国際委員会副会長）が掲げた、赤十字の人道事業の四つの障害の一つに「利己心」があります。

京セラやKDDIの創業者であり、JAL再建に尽力された稲盛和夫氏は、「利他の心」を持つことが大切であると話されていました。

「利他の心」とは、周囲や相手に良かれと思う心で、自分のことだけを考えるのではなく、自分が豊かになりたいと思うならば、周囲も豊かにするように考えることである。

赤十字の精神に基づき、「世界の平和と人類の福祉に貢献」するために、子供たちが青少年赤十字の実践目標及び態度目標を実践できるよう、我々賛助奉仕団員一人一人が「気配り・目配り・心配り」をしていきたいものです。

賛助奉仕団に参加して

針原　正弘

定年退職後、賛助奉仕団員として、青少年赤十字活動に参加してきました。学校を訪問しての青少年赤十字活動への参加の呼びかけ、二泊三日のトレーニングセンターでの子供たちとのふれあい。学校の登録式での講話等々。退職後九年となりましたが、経験の積み重ねを通して、青少年赤十字について、少しずつ理解を深めることができました。

そして、賛助奉仕団活動での先輩方の真摯に取り組む姿。指導者協議会の若い先生方の積極的で情熱的に取り組む姿等。その姿勢かも多くの得るものがありました。

今後も、活動に積極的に参加し、青少年赤十字の考えを、さらに広める一翼を担えればと思います。

ふれ合うことの楽しさを

大山　健治

先ごろ、教職員のバレー大会が三年ぶりに開かれ参加した。アタックが決まると「ナイスアタック」とハイタッチし、「ナイスレシーブ」と手を差し伸べ、「ドンマイ、ドンマイ」と仲間を大声で励ます。忘れていたバレーボールの楽しさ、仲間と一緒にふれ合うことの喜びを久々に味わった。

さて、我々賛助奉仕団のメンバーも、さすがにバレーボールというわけにはいかないが、トレセンの活動で共に汗を流したり、いろいろな話題で語らったりしながらふれ合いを深め、楽しさを共有したいものである。

そして子供たちにも「距離をとって」ではなく、「手をつないで」「声をかけ合って」とふれ合う活動を通して、楽しさを分かち合える日を待ち望んでいる。

できる時にできることを

福留　隆二

私の活動参加のモットーは「できる時にできることを」です。仕事を続けなければならない年齢ですので、先輩方にかなりご負担をかけていることを心苦しく感じております。

青少年赤十字活動について、特段の知識や指導技術を持ち合わせているわけではありません。ただ、子供たちの健気な姿や先輩方の献身的な動きに心を打たれ、自分にできることで協力をさせていただき、すてきな時間を過ごしています。

「気づき、考え、実行する」青少年赤十字の態度目標は、自分にとっても目指す生き方です。青少年赤十字のお手伝いをさせていただき、毎回新たな学びを得ています。それは現職中とは違う「ゆとりある生き方の学び」です。

【余生の年少・年中組】の皆さんへ

森尾　恭光

現役を退いたからって、老け込まないでください。勝手に高齢者を三つの階層に分けてみました。

①余生の年少組（六十代）②余生の年中組（七十代）そして③余生の年長組（八十代）。

高齢者社会では①②が一番元気で力を持っていると考えます。

③になると、気力、体力、記憶力、人脈が喪失気味します。この事実を受け止め、克服できるのは皆さんです。会合のあるたびに、顔は知っていても名前を言えず困惑しているのは私だけだろうか。世代交代の恰好なる時機到来です。

さあ、これからの賛助奉仕団生活を新しいデジタル時代の発想のもと、改革し新風を起こして欲しい。

③世代はついていけるか心配ですが、足手まといにならないように努めます。そして、「温故知新」精神を核に引継ぎもしてまいります。③組も運動機能を増大し、微力ながら奉仕活動に支援努力します。自己身辺処理にも努めながら……

一日も早い活発な活動の再開について

有村　澄子

ここ三年、コロナの影響で夏のトレセンや一日トレセンが中止となり各高校における新入生部員やその活動状況が見えないのが、私には少々不安です。

そのような中で、私はこの三年間、旧勤務校の鹿児島女子高校の部活道のサポートとしては、手話の指導や老人ホームおよび地域のフェスタのプレゼント作りなどに取り組んだ程度です。

ところで、特に高校協議会で取り組んでいた、日赤の平川にある老人ホームの訪問ができないのが、一番気がかりです。以前は各校の当番でレクレーションを考えて集まり、入所者の誕生会を実施してきており、風船あそびや歌や紙芝居などをして入所者の方々からも喜んでもらいました。再度このような活動が一日でも早くできることを願っています。

青少年赤十字の活動の活性化を図るために

石峯　孝

人間として、人間らしい正しい判断力を育てるのに役立つ活動が青少年赤十字の活動である。

青少年赤十字の指導や活動に役立つのが赤十字の基本原則である。

基本原則は次の七項目である。

一、人道　二、公平　三、中立　四、独立　五、奉仕　六、単一　七、世界性

人道　戦場において差別無く負傷者を救護する。あらゆる状況において、人間の苦痛を防ぎ軽減する。

公平　人種、宗教、社会的地位や政治的意見について差別しない。この場合にあっても急を要する困苦をまっさきに取り扱う。

中立　戦闘行為の中においてどちらの側にも加わらない。政治、人種、宗教、思想的性格の紛争に加わらない。

独立　その国の法律に従い行動し、時の政府の思想や政策に左右されないために国の資産による活動はしない。活動資金は国民の愛の寄付金による。

奉仕　利益を求めない奉仕的救護組織である。

単一　一国一赤十字であること。

世界性　世界的機構であること。

赤十字の基本原則を勉強してみて、青少年赤十字の根本に流れる精神は基本原則であることが理解できる。

「小さな思い」

大澤　周二

賛助奉仕団員になって来年度で二十年目を迎える。退職前にＪＲＣの事務局より賛助奉仕団へのお誘いの電話をもらった。その時はなぜ自分が誘われたのかわからず、支部の組織についてもほとんど知らなかった。それでも、何のためらいもなく、すぐに快諾した。それは赤十字についての私なりの思いが子供の頃から続いていたからではないかと思う。

進駐軍の粉ミルクで命を救われたことを何度も聞かされたり、五年生の国語の教科書で「アンリー・デュナン」の伝記を学習したりした事が深く関わっているのかもしれない。なぜか鮮明に覚えているから不思議である。

最後の勤務校が加盟校で、隣の幼稚園と一緒に活動できたことは、大きな喜びであり、賛助奉仕団へとつながっていると思っている。

まず、気付こうとすること

大庭　安孝

五年前の四月、定年を迎え、再任用教員として教職を再出発した。

再任用は、鹿児島市の春山小学校。

そして、青少年赤十字の活動担当となった。委員会で担当した子供たちへは、まず「気付く」ことを話した。「気付く」ためには、「気付こうとすること」が大切だと話した。それが、「考え・実行する」ことの第一歩であることをくり返し話した。

今年も歳末助け合い活動が始まる時期になった。子供なりに多用な中に、多くの子供たちが街頭募金活動に取り組んでくれた。

活動への要請を受け、親子でその意義について話し合った子がいた。国内外の「恵まれない」人たちの存在をインターネットで調べた子がいた。活動をきっかけに、「気付こうとする」子供たちがいた。正に「はじめの一歩」がその時にあった。

初めてのトレセン

諏訪原　裕子

この四月から賛助奉仕団に参加させていただいています。先日高校生のトレセンに初めて参加しました。参加した高校生は、最初は緊張していた様子でしたが、熱心な講師の先生の篤い心に応え、最後のグループ討議では大々、堂々と自分の考えを発表していました。また、相手の考えに耳を傾け、自分の考えを修正したり、相互の考えをまとめたり違いを認め合う素晴らしい場となり、一回り成長したように思いました。講師の先生の事前の準備も緻密ですばらしいなと思いました。

私は非常食炊き出し体験のお手伝いをしました。脈々と続いている技や思いがたくさんあり、多くの事を学ぶとともに感動しました。親切に教えていただき有り難かったです。今後ともよろしくお願いします。

「一歩ふみ出す教育」をめざして

髙島　英夫

この原稿依頼を受けた時、「ＪＲＣとの出会い」を書こうと思いましたが、第七号に同じ題名で寄稿していることに気づき、再び考え、今、実行して書いています。

やはり私が原点としているのは、昭和三十六年発行のＪＲＣ手引「一歩踏み出す教育」です。

その三十一ページに、「ＪＲＣの中心となっている精神は人道の精神です。即ち、赤十字の生みの親、アンリー・デュナンが叫んだAll arc brathersという人間愛の心なのです。ＪＲＣの最終目標は世界の平和なのです。人間どうしが信じ合い助け合っていける明るい温かい世の中をつくることなのです。」とある。

「令和初の離島トレセン」

中村　浩一

本年三月まで指導者協議会長を務めさせていただいた。その間、様々な事業が中止、短縮開催となったが、退職前の一月に離島トレセンに向けた現地調整のため、中野課長とともに与論島を訪問した。

三小一中一高校や役場、社会福祉協議会、会場候補施設などを訪問し、各校長先生方のトレセンに対する期待の大きさを感じた。

そして七月、気にかけていた与論島での離島トレセンが無事開催され、その様子を先日自宅に届いた「赤十字かごしま」に掲載された写真で知ることができた。

離島の子供たちにトレセンを体験する機会を与える本事業は、鹿児島ならではの素晴らしい取組であり、森吉会長をはじめ、スタッフとして参加された先生方のご尽力に感謝するばかりである。

私の青少年赤十字

中山　忠順

青少年赤十字との出会い。それは、昭和三十九年八月の「指導者講習会」でした。

参加者十九名で受講。一泊二日の講習の中身はほとんど覚えていませんが、しかし、この講習会受講は、私にとって、その後の青少年赤十字活動、生き方、教師生活に大きな影響を与えるものとなりました。

翌年、昭和四十年夏の霧島青年の家での中学校トレセンに声をかけてもらい、スタッフとして参加。今日まで、途中二～三年の休みを挟み、子ども赤十字、小、中、高トレセン、指導者、校長等研修会、離島トレセン、九州ブロック講習会等、数多くのトレセン、講習会に参加してきました。

各トレセン、講習会等での出会い、それぞれの研修、体験は貴重なものばかりでした。（自己満足）

もういいかな？これからも？もう少し頑張ってみよう。

青少年赤十字活動の思いで

西村　新

私は、鹿児島県内の九つの学校に赴任した。そのほとんどが、青少年赤十字加盟校であった。いかに多くの学校がこの活動に取り組んでいるかを実感した。私も担任の時はボランティア活動として路上清掃や募金活動を行ってきた。管理職となってからは登録等の活動にも積極的に関わってきた。本部との連携を取る中で活動内容の理解も深まっていった。

ある日、管理職対象の研修会に参加した。その中で今も心に残っているのは避難所開設のシミュレーションに参加したことであった。刻一刻と状況が変化する中で人々の安全を守りながら要望に対応することの難しさを感じた。私は幸いにも現時点ではそのような場面に遭遇したことはない。この研修会では多くの学びを得て貴重な経験となった。

これからも各事業が多くの人々に生きる力を授けていただけることを祈念している。

蝋燭の揺らめき中で

原之園　健児

青少年赤十字に出会ったのは昭和六十年頃。今から三十七年ほど前です。JRCとは全く無縁の私に、室屋勝男先生の「宮崎で九州大会があるから行ってきやんせ」の声かけから始まりました。

一番に思い出すことは、夏のトレセンで、県内の加盟校の子供たちと、そしてスタッフの先輩方と寝食を共にしながら関わらせていただいたことです。霧島はさわやかな風が吹き、赤い屋根の青年の家は、決して新しくはありませんでしたが、心落ち着く場所でした。

そんなステキな場所で、夜になると別室での特別ミーティングが始まります。蝋燭が灯され、先輩方からJRCへの熱い思いを伺い、蝋燭の炎の揺らめきの中、明日へのやる気は膨らんでいきました。

今思うこと

増田　學

賛助奉仕団員ではあるが、今のところ、何もお役に立っていない。過去には、役員もさせていただき、お手伝いが私なりにできたことを思うと残念でたまらない。令和四年度の総会だけは参加し、皆様の変らぬ情熱に感謝した次第である。

私も、都合で長時間の活動ができないので心苦しく思っているが、何とかして短時間の活動やお手伝いができればいいと思っているこの頃である。子供たちのトレセンを始めとする活動の中での変容は驚くべきものであったことを思い出している。子供たちの奉仕への態度が目に見えて変っていくなと感動させられたものである。

賛助奉仕団の先生方には健康に留意されて、この子供たちの変容を引き出してくださるように願っています。

青少年赤十字との出会い

松田　義洋

半世紀前、大保山中学校に入学して初めて青少年赤十字活動を知ることになった。生徒会活動がとても活発で、一年生のころから先輩の活動を見るたびに、自分も三年生になったら生徒会活動をがんばろうと思っていた。

二年生の二学期、生徒会選挙で幸運にも生徒会副会長になることができた。執行部として全体をとりまとめ青少年赤十字活動にも取り組んでみた。充実した中学校生活だった。

五十年たって賛助奉仕団活動に参加したところ、最初の会でその時の中学校の先生に出会うことができた。不思議なつながりを感じた。自分が中学校時代に素晴らしい経験をさせてもらったことを、次の世代につなげていきたいと思う。

赤十字活動の末端を担える喜び

森田　永寛

敵味方の区別なく負傷者は皆助ける!!かつて、赤十字とアンリー・デュナンの話が小学校五年国語の教科書に載っていた。赤十字は知っていたが、アンリー・デュナンと彼の考え方やソルフェリーノでのことなどを知り、私自身が感動したのを覚えている。

後に勤務した阿久根市立尾崎小学校は、青少年赤十字の加盟校だった。開講式に賛助奉仕団の先生が来校され「赤十字の博愛の精神、世界中で行われていること、気付き・考え・実行するの大切さ」を話してくださり、児童が活動の趣旨を理解し、積極的に活動する姿を目にした。

その後、加盟校であるなしに関わらず、青少年赤十字と「気づき・考え・実行する」を紹介し推奨してきた。

退職時、賛助奉仕団員の募集があり加入させていただいた。アンリー・デュナンの精神の普及・実践の末端を担えることを有難く思い活動している。

哀悼

生前のご厚誼とご指導に感謝し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

川畑　護氏　令和四年八月二十八日逝去（享年八十五歳）

有馬　修吾氏　令和五年一月十四日逝去（享年六十六歳）

永野　前子氏　令和五年一月二十日逝去（享年百歳）

令和4年度　賛助奉仕団組織表

役・部等	氏名等（◎は部長、○は監事、※は新団員）
顧問	笛田　茂，室屋　勝男
委員長	野村　大綱
副委員長	針原　正弘
総務部	◎大山，笛田，石峯，増田，西村，○森尾，西田，野村，室屋，※鶴田，田畑
行事支援部	◎草留，中山，上舞，山田島，大沢，川崎，松下，逆瀬川，有馬，松田，郡山
研修推進部	◎出水澤，針原，奥園，瀧山，有村，森，高島，橋口，大庭，森田，※竹山，※中村，
親善部	◎福留，内匠，川畑，永野，迫田，祇園下，中野，上原，北園，原之園，普木，※諏訪原

御協力ありがとうございました。